

植物友の会に参加して

星野フサ

今年の植物友の会で最も注目されるのは原先生からの「採取は絶対にしないこと！」からはじまることである。この注意を忠実に守り、写真でパチリと収め、頭の中に植物の形、色、におい等を記憶させ、名前をメモし、帰宅後、図鑑とメモした名前との対応をする。この方式で私も少しは専門家に近づいた気持ちになった1年であった。

植物の種類は、日本列島の場合、アルプスやヒマラヤのように東西に横たわる大山脈のないことから、多くの植物は大山脈にさえぎられることなく大氷河時代には北からどんどん南に移動し、気候が温暖化すると、南方の植物がどんどん北に移動するという夢のような現実が展開し、その過程で日本の豊富な植物相ができあがって行った。このことは植物化石の研究によって明らかにされて行ったのである。そのような長い時間をかけて北から南から移動して日本特有の種となった貴重な植物を観察する私達のなすべき事は一体何なのか？と考えてしまう一年でもあった。

貴重な植物の保存を良好に行うのはどの方式が最も良いのであろうか？私の郷里は月形で「きすげ」の一面に咲き乱れるあの湿原は焼きはられブラウでひっくり返され、水がはられて今は一面の水田である。その水田からは以前にあった湿原の「かけら」も残っていない。貴重な湿原を保護するために農民への指導がどのようになされたか、聴いた事もなく立のきをさせられた話を耳にしたこともない。貴重な植生は農民の生活のために消えたのである。私の学校へ払う教育費は親の労働（水田）によって入手されたことを思うとなおさら自然破壊と自分達の生活との矛盾に悩むものである。もう一つ車の排気ガスが空気に溶け込み酸性雨を全世界に降らせ世界中の森林が破壊されそうになり、また、車粉が人々の胸の奥深く入り込み出々しい間を我々に提示していることも根元は同じ原因から来ているものと考えられる。

人間が地球上に出現しなかったなら自然破壊は何一つ起らなかったのである。私は生命が誕生した33億年前から現在に至るまでの地球上を支配した植物や動物の変遷を高校生に語る時にはいつもこのことで悩むのである。人類は自然の中でのみ生存が可能であることは言うまでもない。自然との共存をどう行うか？春先、山菜の「かたくり」などが店頭に並ぶが、これを買わない。車には乗らないで歩く。などが全ての人に守られた時に人類と自然の共存が可能になったとして、このこと

の一般への普及をどうするかである。私だけ一人守ったとして残りの何億もの人が守らないのでは意欲が湧かないと思うのは私だけではあるまい。何とかして自然を守るために大切なことを多くの人々に守ってもらいたいものだ。何が最も大事かを一般人へ提起するのは学者（義務教育にとり入れること。母親が小さい時から子供に躑としてとり入れてゆくこと。そして学者・行政のバックアップ）の責務であろう。

植物友の会

星野こずえ

私は今年の「植物友の会」はほとんど参加しませんでした。いろいろと用事があり、覚えているのは真駒内のことだけです。真駒内の中でも最も大きな思い出はとくにありませんが、その中で思いうかぶのはキノコとコケです。

観察したコケにはいろいろありますが、緑色のコケが一面にはえているのもあれば、コケの中からとんがった針のようなものがでていた物もありました。

キノコには、家で帰って思いだして調べてみると「たまごだけ」や、毒の「べにてんぐだけ」など、いろいろながありました。

かんさつして、しょく物にはいろいろなものがあり、そしてそれなりのせいしつがあり、そしてそれなりの生き方が本当に数多くあるんだな。と思いました。

これからもいろいろな植物をかんさつしていきたいと思えます。

山歩き

Part 4



星野さん家の